

ジョージ・A・バーミンガム「クリスマスプレゼント」

八幡 雅彦 (訳)

クリスマスイヴのこと、「密造業者」ドネリーはダンベグのメインストリートをゆっくり歩いていた。

彼は町から数マイル離れたところに農場を持っていた。土地はやせていて場所は辺鄙だったが、家畜の飼育と売買によって安心して快適な生活を送ることができたかもしれない。しかし彼は法律が禁じている生業(なりわい)によって、窮屈で、幾分危なっかしい生き方の方を好んだ。彼のあだ名は、決して彼の行いが恥ずかしいことを意味するのではなかった。密造はアイルランドでは一般的には厳しく非難されるものではなかった。

「密造業者」ドネリーは、通りを歩き過ぎながら知人たちに挨拶した。定評のある店の主人たちは親しい微笑みを浮かべて挨拶を返した。警察署の玄関に立っている巡査部長のガフアーティーでさえか「やあこんばんは」と愛想よく声をかけた。警官と「密造業者」ドネリーの間には敵対感情はなかった。巡査部長も警部もこの男を見張るのが義務だと感じていたけれども、そしてドネリーは警察と特別に親しい関係を求めているわけではなかったけれども。

彼はパブ「マイリア」に入ることなく通り過ぎた。それはガフアーティー巡査部長を少し驚かせた。というのもドネリーはダンベグにやって来た時には、普通、晩方は「マイリア」で飲むからだった。彼は警部であるジェイムソン氏の家を通り過ぎた。ジミー・オハラは弁護士だった。住民たちへのこれ以上ないお披露目として事務所の玄関に真鍮の表札を掲げ、汚点ひとつない履歴書を唯一の元手に2年前にダンベグで開業した青年弁護士だった。

ガフアーティー巡査部長は、ドネリーが弁護士事務所に入って行くのを見ても驚きはしなかった。法律に背く人間が弁護士と関わりがあっても不思議ではない。通称「密造業者」ドネリーは、軽犯罪裁判所ではオハラのことを役に立つ弁護士だとみなしていた。一方、

オハラはドネリーのことを満足できる依頼人だと思っていた。時々、ドネリーの弁護をするのは難しいことがあったが、ドネリーはいつも弁護士費用をきちんと払い、たいがいはオハラに感謝していた。

ジミー・オハラは書きもの手を休め、顔を上げた。

「こんばんは、ドネリーさん。今度はどんなトラブルですか」

「何のトラブルもありやしません。わしが先生のところに来たのは仕事の用じゃありません。どちらにせよ弁護を頼むためじゃねえんです」

「仕事の用事でないとしたらお酒ですか。でもあなたに差し上げられるお酒はありません」

「えっ、ねえですと」

「ありません。今はウィスキーは高すぎて人にあげられる余裕などありません。あなたは信じてくれないでしょうが、あのマライアの悪党、この前私が1本買った時15シリングもふっかけてきたんですよ。その後で私は二度と買わないからと言ってやりました」

ドネリーは、まるで誰かが隠れて聞いていないことを確かめるかのように、事務所の中を見回した。彼はドアのところまで歩いてゆき、注意深く閉めた。そしてオハラが座っている書き物机に椅子を引き寄せた。

「今、この家にゃ酒は一滴もねえですと」

ドネリーは話しながら片目を閉じた。オハラはウィンクに気づいたが、その意味が理解できなかった。

「一滴もありません。でもよろしければ紅茶を入れましょうか」

「紅茶など冗談じゃねえです。ところでわしが先生に送ったリンゴのこと、どうお思いなさる」

「ああ、リンゴをくれたのはあなただったのですか。サディー・マハの息子がここに籠を置いていったのですが、私はその時外出してどこから送られてきたのか分かりませ

んでした。ありがとうございます、ドネリーさん」

「上等なリンゴですぞ、どれも」

「おいしそうなリンゴですね。でもまだひとつも食べていないんです。実を言うと、ドネリーさん、私はリンゴがあまり好きじゃないんです」

「籠を開けて下さったですか」

「二階の床に全部放り出しました。もしよかったらこの籠は持って帰って下さい」

「リンゴを放り出したですと。全部ハケたんですかい」

「ええ、ひとつ残らず。籠をひっくり返しましたから」

「なんということじゃ！ わしゃもうおしまいじゃ。オハラ先生、ひよつとしたらあんたもトツつかまるかもしれませぬぞ」

「あなたの言っていることが理解できません。あなたはリンゴを盗んだのですか」

「リンゴを盗むですと！ わしがリンゴを盗むような人間に見えますかい。じゃが、わしゃ、もう半年余分にブタ箱にぶちこまれるとしても、あのサディー・マハのアホ息子をブツ殺してやりますがな。あのアホ息子のせいですわ。わしゃ、あいつに、どちらの籠がどちらか、後で間違えっこねえくらいに分かりやすく教えてやったんですぞ」

オハラはドネリーの言うことが理解できなかったが、その強烈な話し方ゆえに心を動かされた。

「あなたがどういうトラブルなのか話してくれたら、私は力になれるかもしれません」

「先生がわしを助けてくれるなんてできやせんです。誰もわしを助けることなどできやせんです。じゃが、なにがあったかっちゅうと、警部のジェイムソンがこないだうちの道を通りかかって、わしがうちの裏の小屋にリンゴを積み重ねているのを見たんです。警部が、『ドネリー、いくつか売ってくれないか』と言うもんですから、わしゃ、『警部、もっといいことしてあげますぞ。警部が好きならプレゼントしますぞ。リンゴは腐るほどありますから』と答えたんです。機会さえありゃサツにはいてねいにしとくんがいいでしょうが。だからわしゃ、リンゴを籠に詰めてサディー・マハのせがれに届けたんです。あいつ

がロバと荷車を引いて町に行くもんですから。それをジェイムソンの家に置いとくよう言いつけたんですわ」

「そして彼は間違っってここに置いたというわけですね。もしそれだけだとしたら、何も問題はないです」

「ところがそれでおしまいじゃねえんです。もっと先の話があるんですわ。オハラ先生、わしゃあんたに差し上げたいと思っつたちょつとしたものがあつたんです。それでサディー・マハのせがれにそれも一緒に持って行かしたらよかろうと思ひまして。そこで、わしゃ、そいつを籠に詰めて、サツの奴らに怪しまれねえようにリンゴをいくつかその上に載せたんです。ボトルを6本忍ばせたんです。あそこの蒸留所でできるのに負けねえくれえ上等なのを」

「ウィスキーですね」とオハラ。「密造酒ですわね」

6本のウィスキーが手に入る、1本15シリングもするウィスキーが。「密造業者」ドネリーが彼自身の手で作り、こっそり寝かせておいたウィスキーが。このワクワクする思いでオハラは目が暗み、事の重大さに気がつかなかった。しかしほんの少し考え、彼は何が起きたかを悟った。

「なんということだ！ サディー・マハの悪党息子、籠を間違った家に置いたんですわ。私のところにリンゴを置いて、警部のところにウィスキーを置いたんですわね」

「これでわしゃブタ箱行きですがな。警部は、ずっと前からわしが密造酒を作つとるのをアゲようとしりました。これでわしゃ現行犯逮捕ですわ」

オハラはドネリーが牢屋に入れられることを考えても大して困惑しなかった。彼は前にも牢屋に入ったことがあり、もう一度入ってもさしたる変わりはない。オハラを困惑させたのは、6本の上等なウィスキーを失うこと、自分が失うだけでなく—それだけでも十分悪いことだったが—この世界が、渴きで飢えているこの世界がそれらを失ってしまうことだった。警察は間違いなくウィスキーをたたき割ってしまうだろう。

「とにかく取り返しませうよ」と弁護士。「たぶん警部はまだ籠を開けていなくて、中

に何が入っているか知らないでしょう。私がすぐに警部の家に行きます。それで間違いがあったと言います。籠を取り換えてくれるよう頼みます。ドネリーさん、あなたは私が戻って来るまでここにいて下さい。それから2階の居間に行ってリングを詰め直して下さい。それで警部が籠の交換に応じたら、私はすぐに彼のところに持って行きますから」

ジェイムソン警部は家にいた。彼はオハラをこの上ない親しみをこめて迎え入れた。警部は、ふたつのリングの籠と、その間違っただ配達の話、特段興味を示すことなく聞いた。オハラは安心した。明らかにジェイムソンはまだ籠を開けておらず、リングの下に何が隠されているか知らないと思はれた。彼は籠の交換を申し出た。ジェイムソンはわざわざ籠を取り替える必要はないと思はれた。

「君は君のを持っておくがよい。私は私のを持っておく。どちらにせよ同じことだろう」

「それがまったく違うんです。私が持っている、本当はあなたのためのリングは最高級のもので、大きさが2倍もあって、何をとってもずっと上等なものです。ドネリーがそのように申しおりました。彼はそのことでかなり困惑しております。気の毒な男です。彼はあなたにいい方を受け取ってもらいたがっております」

「私は小さなリングの方が好きだ。だから間違いがあったとしてもどうでもよい。ドネリーにはそのように伝えておいてくれ。それに私のが小さいなんてことはない。私は、今先、籠が置かれていた台所に行って見てきた。私にはとても上等なリングに思えた」

オハラは、絶望的になって、真実を言いかけた。

「私が持っている籠はリングがいっぱい入っているんです。しかしあなたのところには置かれていた籠には半分しか入っていないのです。警部、もし私が、私のところにあるリングをずっと持っているとしたら、私はあなたから盗みを働いているような気分になるのです」

「君はちっともそんな風に感じる必要はない。私はここにあるだけのリングで十分だ。実際、もうこれ以上欲しくないくらいだ。たぶん腐らせてしまうだろうから」

オハラは落ち込んで彼の家に戻って行ったが、まだあきらめていなかった。

「警部はまだ籠を開けていません」彼はドネリーに告げた。「その点だけは安心していいです。しかし警部は交換に応じてくれません。私は打つ手はひとつしかないと思います。ドネリーさん、あなたは今までに強盗をしたことはありますか」

「強盗ですと。冗談じゃねえです。それにこれからだつてこれっぽっちもやろうと思つとりません」

「今夜、あなたはやらなければなりません。あなたと私と一緒に出かけ、ジェイムソン警部の家の台所から籠を持ち出すのです。十中八九、家の裏のドアは鍵が掛かっているでしょう。ダンベグでは誰も鍵を掛けませんから」

「そんなことしたら、わしゃ、10年間、強制労働付きでブタ箱にぶち込まれますがな」

「もし私の言う通りにしなければ、あなたは間違いなく牢屋行きになるでしょう。しかし私たちがうまくやりおせば、誰も何も言いませんよ。私たちはこちらの籠を持って行って、代わりに置いておくのです。そうすれば誰も強盗があったことなど気づきませんよ。悔しくありませんか、ドネリーさん、みすみすウィスキーを6本も台無しにしてしまうなんて。ここであきらめて、警察の連中がその上等な酒を全部溝に流してしまったとしたら、私は自分を呪いますよ」

「密造業者」ドネリーは言いくるめられた。真夜中の3時、彼とオハラは用心深く通りに出た。あたりは真っ暗だった。町のどの窓にも明かりは灯っていない。物音ひとつ聞こえなかった。彼らは籠をふたりで運んだ。

「神様、どうかサツの連中はベッドの中でぐっすり眠つとりますように」ドネリーは言った。

「間違いなく眠っていますよ」とオハラ。

「警察官はみんな太っているでしょ。特に巡査部長の太り方といたら。もし彼らが毎晩道路を歩いてパトロールしているとしたら、あそこまでは太りませんよ」

オハラの推測は間違っていた。警察官たちは、太っていたが、夜、彼らの地域を規則的にパトロールしていた。数分後、オハラはそ

の事実を認識するに至った。

ドネリーはジェイムソン警部の家の裏庭と道路を隔てている壁に上った。彼は内側の地面にゆっくりと下り、小さく口笛で合図した。オハラはリンゴの籠を壁の上に置いた。と、その時、彼は重い手が彼の肩にかかるのを感じた。

「そこで何をしているのかね」

オハラはギョッとしたが、心の平静を失うことはなかった。聞き覚えのある声だった。ガファーティー巡査部長の声だった。

「こんばんは、巡査部長。あなたは私をご存知かと思えます。弁護士のオハラでございます」

巡査部長は驚いた。巡査部長はその言葉を聞いて、彼が肩に手を置いた相手はオハラ弁護士に間違いのないことを確信した。酒は一滴も入っていない、そして定評ある弁護士がしらふで強盗を働くことなどあり得ないことも十分確信していた。彼は躊躇して、それからもう一度質問を繰り返した。

「ところでオハラ先生、あなたは何をしているのですか」

「実は」と弁護士。「ジェイムソン警部にリンゴをいくつか届けに来たのです。壁の上の籠がそうです。もしよろしければ中をご覧になって下さい。リンゴだということがお分かりになるでしょう。私は警部を起こしたくなかったので、裏のドアから中に入れようと思ったのです。きっと鍵は掛かっていないでしょうから」

アイルランドでは奇妙なことがよくある。そして、経験豊かな警察官たちは何事にもめったに驚かない。しかしガファーティー巡査部長は、正直なところ、弁護士の話には驚いた。

「人にリンゴを届けるにしては夜の妙な時間ですねえ。もしリンゴを届けるのでしたら、昼間でもよろしいのではないですか」

「巡査部長、私はちょっと警部を驚かせたいのです。明日はクリスマスです。あなたはお忘れになっているのかもしれませんが。リンゴといっしょに簡単な新年の挨拶を添えて、警部が明日の朝見るところに置いておこうと思っているのです」

ガファーティー巡査部長は重大な疑いを抱

いた。もしオハラ弁護士を強盗の罪で逮捕するとしたら、悪い過ちを犯すことになるかもしれない。オハラ弁護士は後になってものごとを厄介にする性質（たち）の人間だった。しかし他方で、彼は、彼の上司の家が真夜中に、たとえ弁護士とはいえ、強盗に入られるのを許すわけにはいかなかった。

「巡査部長、ここにいていただく必要はございません」オハラは明るく言った。「きっとあなたにはお仕事がたくさんあると思います。私は自分ひとりで籠をどうにかできますから。そんなに重くはありませんから」

その時、表の玄関のドアが開いて、ジェイムソン警部がパジャマ姿で、寝室用のろうそくを持って道に出て来た。

「いったい何事だ」と警部。「おや、ガファーティー巡査部長ではないか」

「左様でございます」

「話しがあるのだったらもっと別のところでしてくれないかね。子どもが起きてしまったではないか。おかげで女房も起きてしまって、わしはいったい何が起きているのか見に来るハメになってしまったのだぞ。強盗かね」

「その可能性があります」と巡査部長。

「いえ違います」と弁護士。「私です。弁護士のオハラでございます。リンゴの籠を警部殿のもとに持って参ったのです。二抱えも三抱えもあるリンゴを、しかも上等なリンゴを警部殿から奪ったと思うとオチオチ眠ることもできなかつたのです。良心の呵責にさいなまれまして、起き上がって警部殿のもとにすぐにお持ちしなくてはと思ったのです。巡査部長が私に話しかけさえしなければ、警部殿は何ひとつお気づきにならなかつたでしょう。私は警部殿もお子様も起こすことはなかつたでしょう」

「巡査部長」とジェイムソン警部。「もう良い。君はパトロールを続け給え。オハラ君、こんなところにいるくらいならうちに入って一杯やらないかね」

「ありがとうございます。それではお言葉に甘えて」

「リンゴはそこに置いたままにしておき給え。誰ひとり触らないだろう。明日の朝取りに来ればよい」

寝室用のろうそくの明かりでジェイムソン

警部はふたつのグラスを見つけた。それから食堂の食器棚の鍵を開け、ボトルを1本取り出した。

「オハラ君、そのウィスキーを一ロストレートで飲んでみ給え。私は君が水で割る前にその味をどう思うか意見を聞きたい」

オハラは口をつけた。それは上等なウィスキーだった。スコッチウィスキー特有の煙りくさい味がした。オハラはグラスの匂いをかぎ、そしてもう一口飲んだ。

「ご冗談でしょう！ 警察官ともあろうお方が」

「それを言うのなら君だってれっきとした弁護士だろう。職業に関して言うのならわれわれの間には大差はない」

「今晚、私が籠の交換をお願いにやって来た時、警部殿は6本のびんをとっくに籠から出して、鍵を掛けてしまわれていたはずです」

「その通りだ。しかし本当のことは言いたくなかった」

「ドネリーもひと安心でしょう。あの哀れな男は間違いに気づいてすっかり気が動転しておりましたから。当然警部殿にはバレてしまったと思って・・・」

「今でもそう思っているだろう。私は、彼が、巡査部長が背を向けるとすぐに壁を乗り越えて飛んで逃げて行くのを目撃した。今夜は不安で眠れないだろう。しかし、彼が前と同じリンゴが入った別の籠を持って来てくれたら私は彼に一抱えにつき5シリング払うと伝えてくれ給え。彼はまだ沢山持っていると思うのだが」

「何樽も持っております」とオハラ弁護士。

通常リンゴは「樽」では計れない。しかしジェイムソン警部はオハラ弁護士の返答になんらおかしなものを感じた様子ではなかった。

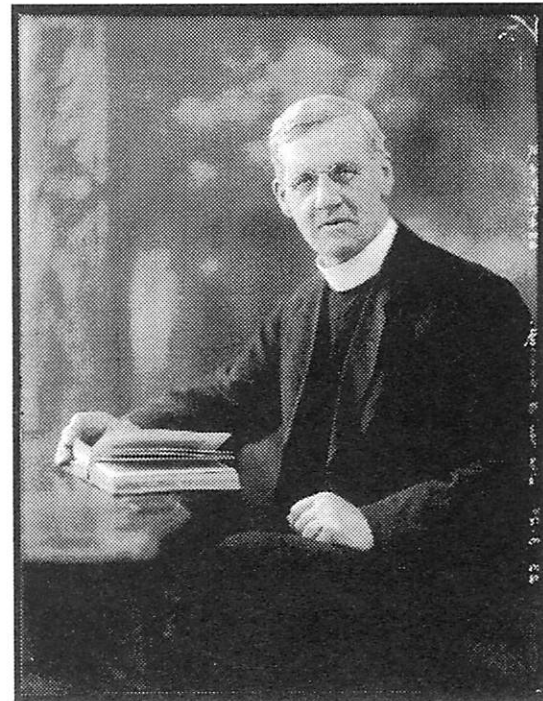
[使用テキスト]

George A. Birmingham, "A Christmas Hamper," *Love or Money and Other Stories* (1935; rpt., London: Methuen, 1939), pp.130-142.

[ジョージ・A・バーミンガム略歴]

本名はジェイムズ・オウエン・ハネイ (James Owen Hannay)。1865年北アイルラ

ンドの首都ベルファーストの、プロテスタント系のアイルランド国教会聖職者の家庭に生まれる。トリニティーカレッジ・ダブリン神学部に学び、聖職者としての務めを果たす一方で、1905年『煮えたぎる鍋』*The Seething Pot* で小説家としてデビュー。初期の作品においてはアイルランドのナショナリスト（アイルランド独立派）とユニオニスト（イギリス残留派）の対立を深刻に描いていたが、1908年の『スペインの黄金』*Spanish Gold* 以降はユーモア小説に転じ、両派の対立を諷刺を交えて描くと同時に、両派の融和を真に願う作品を発表し続けた。代表作に1913年の演劇『ジョン・リーガン将軍』*General John Regan* があり、ロンドン、ニューヨークでは大きな好評を博したものの、翌年、アイルランドのウェストポートで上演された時には「アイルランド人を誹謗した」との誤解を受け、アイルランド演劇史上最悪の暴動が起きた。生涯に約70の小説を発表し、母校トリニティーカレッジ・ダブリンより名誉文学博士号を授与され、1950年ロンドンで85歳の生涯を閉じた。



1927年当時のバーミンガム
(National Portrait Gallery London 提供)

本稿は、日本学術振興会科学研究費助成による研究成果の一部です。